

NRI 学生小論文コンテスト2011

募集告知から審査、 そして表彰まで

募集告知

“日本を元気にする”を掲げ 論文コンテストがスタート!

2011年のコンテストのテーマや募集要項をNRIのホームページ上に発表したのは5月10日。
以降、今年も多くの人にコンテストに応募いただこうと、告知活動を展開しました。
まずはチラシやポスターの配布。新聞や雑誌に広告も掲載。
全国の高校や大学にも案内を送りました。

“日本を元気にする” を掲げた理由

景気回復の道筋が見えないなか、東日本大震災の影響を受け、日本の閉塞感はさらに強まっています。“日本を元気にする”というキーワードには、若い皆さんの斬新で力強い提案によって、この閉塞感を打破して日本を元気にしてほしいという期待を込めました。

「2025年」という テーマについて

約14年後の2025年、高校生から大学院生の皆さんは30代を迎えているはず。社会を担う一員となった自分を想像して、そのとき何ができるのかを具体的に考えてほしいとの思いから、「2025年」を今年のテーマにしました。

ペア応募のねらい

毎年、考察不足の残念な論文が少なくありません。そこで、話し合うことが考えを研ぎ深めることにつながるのではないかと、ペアでの応募を受けつけるようにしました。

第6回 “日本を元気にする” NRI学生小論文コンテスト2011

大学生・留学生・高校生の若い世代の皆さんから
日本を元気にする力強い提案を募集します。

野村総合研究所は、これからの社会を担う若い世代の皆さんに、日本の将来に目を向け、日本再生のために、何をすべきかを真剣に考え、その熱い思いを発表する場をもつていただこうと、2006年から「NRI学生小論文コンテスト」を開催しています。全国の学生の皆さんから、日本を元気にする斬新で力強い提案をお待ちしています。

大学生の部
テーマ：2025年、新しい“日本型”社会の提案
賞：大賞1名 賞金50万円 [優秀賞若干名] 賞金25万円 [佳作若干名] 賞金5万円
応募資格：日本の大学院、大学、短大、高等専門学校(4～5年)に在籍している27歳以下の、学生の個人またはペア。

留学生の部
テーマ：2025年、新しい“日本型”社会の提案
賞：大賞1名 賞金50万円 [優秀賞若干名] 賞金25万円 [佳作若干名] 賞金5万円
応募資格：日本の大学院、大学、短大、高等専門学校(4～5年)に在籍している30歳以下の、留学生の個人またはペア、ペアの相手は、留学生の部の応募資格者に限る。

高校生の部
テーマ：2025年の日本を担うわたしの夢
賞：大賞1名 賞金30万円 [優秀賞若干名] 賞金15万円 [佳作若干名] 賞金3万円
応募資格：日本の高校、高等専門学校(1～3年)に在籍している、学生の個人またはペア、ペアの相手は、高校生の部の応募資格者に限る。

2011年6月1日(水)～9月7日(水)

野村総合研究所
Nomura Research Institute

駅で… 学校で… コンテストの告知を展開

全国の大学敷地内の掲示板や書店のインフォメーションコーナーなどに、ポスターやチラシを張って、コンテストを告知。利用者の多い駅の構内にも、コンテストのポスターを掲示して、開催をアピールしました。さらに、NRIの有志社員が、出身校にメッセージを添えてポスターやチラシを送ったり実際に足を運んで学生たちに直接呼びかけたりする告知活動に参加しています。(詳しくはP92)



審査

いくつもの段階を経て 決定される入賞論文

入賞論文を決定するまでには、
事前審査、1次審査、2次審査という3つのステップを踏みます。
事務局での事前審査の後、一定の基準をクリアした論文がNRI社員による1次審査に進みます。
どの審査においても、規定の評価基準に基づいて慎重に評価されます。
1次審査で評価が高かった20点の論文が2次審査に進み、
2次審査会において入賞論文が確定します。

募集 2011年6月1日～9月7日 コンテストの告知活動を通じて応募を呼びかけ

事前審査 9月15日～10月3日 事務局で応募論文が審査基準を満たしているか確認

1次審査 10月5日～10月20日 NRIグループの社員が論文を評価し20点の論文が2次審査へ

2次審査 10月24日～10月31日 9名の2次審査委員が論文を評価

2次審査会 11月1日 2次審査委員が集まり入賞論文を選出

入賞論文発表 11月4日 NRIホームページで発表

論文審査の評価基準

テーマと論点の整合性

考察力・分析力

- 論点やテーマ、着眼点の独自性・斬新さ
- 具体例、数値を使用するなど
論点のわかりやすさ
- 論点への考察の深さ

提案力

- 提案や解決策の独自性・実現性
- 提案や解決策のスケールの雄大さ、
視野の広さ
- 提案内容、主張の明快さ

文章力

- 論文構成のわかりやすさ、文法の正しさ
- 誤字・脱字の少なさ

評価基準以外の プラスアルファ

上記に該当しない点を評価

評価基準以外の尺度で高く評価された論文は、この項目で加点されます。例えば、執筆者の熱い思いや、独自の調査・取材などが評価されます。



論文の要約も 審査の大切なポイント

応募論文には、大学生・留学生は400字程度、高校生は200字程度の要約をつける必要があります。この論文の要約も、審査項目の一つです。2次審査の対象となった論文については、NRI社員が論文の要約を読んで投票を行いました。投票の結果には、2次審査会の参考として審査委員も目を通してあります。

論文要約投票の評価基準

- 論点やテーマ、着眼点の独自性
- 提案や解決策のスケールの雄大さ
- 視野の広さ

上記の視点から、最も優れていると考える1作品を選んでNRI社員が投票しました。

論文要約投票の感想

「本文を読みたいと思わせる、論文の内容がわかりやすいものを評価しました」

「キャッチーなキーワードが入っているものは興味を引きます」

「執筆者の熱い思いが要約からも感じられたので本文を読みたいと思いました」

「主張したい点をはっきりと書かれているものを選びました」

2次審査会

完成度の高い論文を前に議論にも熱が入る審査会

2次審査は、審査委員長を務めるNRI理事の椎野孝雄に、特別審査委員の池上彰さんと最相葉月さん、6名のNRI社内審査委員が一堂に会し、議論を深めながら進めます。2次審査に残った20作品の中から、10点の入賞論文を決定しました。



今年は、論理的で構成力のある「論文らしい論文」が多かったと思います。停滞している大人の社会への、若い世代からの挑戦とも受け取れるような斬新な論文もありました。高校生については、筆者の体験から興味のある分野を掘り下げて執筆されていて、楽しく読ませてもらいました。留学生の、日本のことをよく調べて執筆している点は評価しています。欲を言えば、母国と日本の対比が含まれているとより素晴らしかったと思います。大学生は、問題提起、事実検証、提案という論文の構成をきっちり意識した作品が多かったです。皆さん書籍やインターネットを活用してきちんと調べて執筆していますが、文献調査だけでなく、独自の調査を実施している論文には、とりわけ説得力を感じました。



審査委員長
椎野 孝雄
理事



特別審査委員
池上 彰 さん
ジャーナリスト

全体を通して、3月11日の東日本大震災後の日本について問題意識を持って執筆された論文が多く見られました。高校生の論文は、応募数が増えたためバラエティーに富んでいました。高校生らしい夢のある提案は、読んでいてワクワクします。大学生に関しては、しっかりと構成された論文が増えた印象ですが、論文執筆に当たっては、想像力を働かせて自分の主張に対する反論について考えてみることも大切。それをつぶしていくプロセスを経ることで、論文はさらに完成されていくものだと思います。留学生の論文は、日本という国の特徴をととても的確にとらえていて非常に感心しました。留学生らしい独自の視点をもっと押し出せると、より魅力的なものになったのではないのでしょうか。

今年は、地震や津波、台風などさまざまな自然災害、そして原発事故という非常にショッキングな出来事があり、科学技術や社会、自然に対して人間がどう向き合えばよいのか、深いところで問われた1年でした。そういう年に学生の皆さんがどんな未来を描くのか、たいへん興味深かったです。論文からは、皆さんが積極的に日本の未来を切り拓いていこう、変えなければいけないという意識を持っていることを感じ取り、頼もしく思いました。高校生の論文はユニークな提案が多く、とても面白かったです。大学生と留学生は、論文のレベルは高いのに執筆者の個性があまり出ていないところが残念でした。今年は、私が昨年提案させていただいたペアでの応募も多くあり、嬉しく思っています。



特別審査委員
最相 葉月 さん
ノンフィクションライター

審査委員

三浦 智康

執行役員、
総合企画センター長



初めて2次審査会に参加しました。提案のキーワードは優れているのに、説得力のある論旨を展開しきれていないものが多かったのは残念です。このコンテストを、文章を書く訓練の機会ととらえて、より多くの人たちに挑戦してほしいと思います。

審査委員

淀川 高喜

研究理事



毎年、皆さんの論文には非常に感心させられています。独自の視点で書かれている、独創性のある論文を高く評価しました。今年は、留学生よりも大学生の論文の方が、斬新な発想の面白いものが多かったと感じました。

審査委員

中元 秀明

イノベーション開発部



皆さんから湧き出てくるさまざまな新しい提案を、毎年楽しみにしています。大学生と留学生は非常によく勉強して論文を執筆していますが、あっと驚かされるような、革新的なアイデアは少なかったように感じました。

審査委員

野呂 直子

人材育成戦略部、
人事部



今年は東日本大震災を通して考えたことが論文に盛り込まれており、感慨深く読ませていただきました。学生の皆さんが夏休みという貴重な時間を割いて執筆した論文を読むことは、楽しみでもあり、同時に緊張もしますね。

審査委員

野村 武司

コーポレート
コミュニケーション部長



毎年、ユニークな発想と夢のある提案に出会えるため、特に高校生の論文は、読むのが楽しいです。なかでも、具体的な将来の夢に触れているものや、ビジネスとしての側面を意識しているものに注目し、高く評価しました。

審査委員

横山 喜一郎

CSR推進室長



今年は、大学生の論文の質が上がったと感じました。高校生については、アイデアの面白さを優先して評価しました。文章から筆者の思い入れの強さを感じられる論文は、引き込まれるし、好感が持てます。



論文発表会

NRI社員に向けて 入賞者がアイデアや夢を提言

NRI本社の会議室で11月22日の夕方、
「NRI学生小論文コンテスト2011」
論文発表会が催されました。
NRI代表取締役社長の嶋本正をはじめ、
1次審査に参加した有志のNRI社員、
2次審査委員ら約40名に向けて、
9名の入賞者たちが
論文にまとめた自身の提言内容を発表しました。

論文発表会は、NRI代表取締役社長の嶋本正の挨拶で始まりました。嶋本は「論文コンテストを通してNRIと一緒に日本の未来について考えてもらいたい。今年の大きな出来事として東日本大震災があったが、先行きが不透明な状況でも、どんどん勉強とリサーチを進めて先を見通していく姿勢を持ち、意識して自らの力を磨いてほしい」と述べ、入賞者たちの未来に向けてエールを送りました。

その後、大学生4名、留学生2名、高校生3名の入賞者が一人ずつ前に出て、論文の概要をまとめた資料とともに発表を行いました。発表の持ち時間はひとり5分。NRI社員を前に、入賞者たちは緊張した表情を見せながら、自分の論文を解説していきました。

会場では、メモを取りながら発表を聴く姿が多く見られました。学生たちの堂々とした発表に圧倒されたNRI社員もいたようです。発表後の質疑応答では、論文執筆にあたり調査した内容の具体的な例や、提案を実現するための現実的な施策などについて質問が出ました。質問に対して、発表者は考えをまとめながら、丁寧に答えていました。



入賞者とNRI社員との懇親会

論文発表会の後は部屋を移動して、懇親会が催されました。入賞者とNRI社員が飲み物などを手に、応募のきっかけや執筆の苦労話などを語り合う姿も見られました。入賞者たちの、発表会用の資料づくりに初めて挑戦したという声や、NRI社員を前に発表するのはとても緊張したという感想などが聞こえるなか、和やかな雰囲気での懇親会が締めくくられました。



挨拶をするNRI代表取締役社長の嶋本正

NRI社員を前に自分の論文を発表する学生たち

授与式

入賞者の皆さん、 おめでとうございます！



11月23日、品川のホテルラフォーレ東京でコンテストの表彰状授与式が行われました。当日は入賞者とその家族、学校関係者などを招いて、入賞を祝いました。

最初に、NRI取締役会長の藤沼彰久が列席者の皆さんに祝辞を述べ、入賞者一人ひとりに表彰状と副賞を手渡しました。入賞者たちは晴れやかに誇らしげな表情をたたえながら壇上上がり、表彰状を受け取りました。

表彰状の授与が終わると、2次審査会の審査委員長を務めたNRI理事の椎野孝雄が、それぞれの論文の読後感を交えて講評を述べました。続いて、特別審査委員を務めたノンフィクションライターの最相葉月さんが、入賞論文一つひとつにコメントを加えながら審査の感想とお祝いの言葉を伝えました。

祝賀会には入賞者とその家族、特別審査委員の最相さん、審査委員を務めたNRI社員、来賓者らが出席しました。和やかな雰囲気の中、最相さんやNRI社員と記念撮影をする入賞者の姿や、入賞者同士で今後も連絡を取り合う相談をする姿など、積極的に交流する様子が見られました。



提案がきちんと評価されました！



審査の講評に聞き入る入賞者たち



大学生の部 大賞

波利摩 星也 さん

論文執筆のきっかけは、東日本大震災で被災した東北の復興モデルを提案したいと思ったことでした。不要なものからエネルギーを生み出して交通インフラに活用するという案を思いつき、この技術を東北から世界に発信していくことに意義があると考えました。未曾有の大震災を受け、閉塞感が強まっていく日本を、この先引っ張っていくのはわれわれの世代です。論文執筆を通して、小さなことでも世の中に発表することで共感を生み、世の中を変えていくきっかけになると感じました。



留学生の部 優秀賞

李 晨君 さん

中国で日本語を勉強していたときに、日本の強さを実感し、「グローバル化する世界のなかで、日本と日本の企業はどのような方向に進んでいくのだろう」と考えを巡らせていました。日本も日本の企業も優れていますが、今までとは違ったアピールで世界に魅力を伝えていくにはどうすればよいのか。そんなことを考えながら論文を書き進めました。日本に留学してまだ間がなく、日本語で論文を書いたのは今回が初めてです。受賞できるとは思っていなかったのが本当にうれしいです。



高校生の部 大賞

伊藤 愛里咲 さん

仙台に住んでいることもあり、東日本大震災はとても身近な出来事です。今回、論文を書くにあたって、震災について触れることにしました。授業以外で論文を書いたのは今回が初めてでしたが、思ったよりもスムーズに執筆することができました。小学生の頃から研究していたヒキガエルを題材に、放射能除去について書いた論文で大賞を受賞できたことはとてもうれしいです。現在は運動部の部活動に熱心に取り組んでいますが、将来的には農学部に進学して勉強を続けたいと考えています。



特別審査委員の最相さんとともに



「論文まとめるのはたいへんだった？」



論文に対する感想は気になるもの



「本当におめでとう！」



家族もまじえて話が盛り上がります



入賞者同士、これから連絡を取り合います

コンテストへの応募動機

自分への挑戦、世の中への貢献が
応募のきっかけとなっています。

大学生

留学生

東日本大震災で、日本が窮地に立たされている現状に対し、将来を担っていく世代の一人として、**自分の国の実情を知り、未来に何を提案できるか**試してみたかった。(大学3年)

日本の未来への提言を行うという、**知的好奇心を刺激される、また大きな意義を感じるテーマ**に挑戦したいと考えたため。(大学4年)

自身に取り組む研究活動のアウトプットの一環としてちょうどよい機会と思い、応募しました。学部・修士課程で培った知識が、政策提言として将来の日本に少しでも寄与できればと考えています。(修士1年)

今年日本が経験した大震災で、リアルタイムに自分が感じ、考えたことを少しでも多くの人へ伝えたくったから。**大学生という今しかない瞬間の感性で、感じたことを形として残しておきたかった**。(大学3年)

日本の未来の可能性に向けて、興味深い題目で論文を募集しており、毎年気になっていた。**最後の学年なので挑戦しようと思った**。(大学4年)

普段から経済に関心があり、将来は日本経済の政策にも携わる仕事に就きたいと考えているため、**自分の考えと真剣に向き合い、よりしっかりした考えを持ちたいと思った**。(大学3年)

学生が活躍できる場を与えてくれることに大変感動しました。内容も面白そうだったので挑戦しました。(修士1年)

就職活動中に考えたことを研鑽し、形に残しておきたいと考えたため。またそれが人の目に触れることで何らかの影響を与えられれば幸甚と考えた。(大学4年)

学内だけではなく、**私の考えを広く社会に伝え、それがいかに評価されるか知るため**です。多くの人に私自身の考えを伝え、意見を聞くことによって、私の考えはより深まり、磨かれると思います。(修士1年)

留学生の目線から日本を観察したこと、これからの日本が改善すべきことを論理的に書き、**震災後の日本人を応援する気持ち**で応募しました。(大学2年)

日本人が気づいていない**日本の魅力、強み**を大勢の方に伝えたくて、応募することにしました。(博士1年)

学校で学んだ知識や関連書籍を通じて自分なりの論理を持っていたが、それを共有できる場がなかった。**未来の社会づくりに自分のアイデアが反映され、貢献できるかもしれない**と考えた応募した。(大学3年)

今回の提案によって、日本人だけでなく、留学生や外国人労働者など、日本社会で生活するすべての人々が笑顔で、共に同じ夢や目標を抱き、**互いに手を取り合って「和」を尊重しながら共生する社会**になってほしいと考えました。(修士2年)

自分の考えを整理し、**第三者による評価を受けた**から。(大学4年)

コンテストへの応募動機

チャレンジ精神や思いを伝えたい気持ちが論文執筆のベースにあります。

高校生

高校生となった今、将来のことを少しずつ考え、目指す姿を小論文として現在書き表すことで、**これからも夢に向かって日々精進していくことができるのではないかと**考えました。(高校1年)

以前から日本の社会的課題や国際問題に関心があり、その解決に少しでも貢献したいと思っていました。私の夢を実現させるには、自分が考えることの必要性や効果を論じ、多くの人に納得してもらわなくてはなりません。その第一歩として**自分の考えをまとめ、伝えることに挑戦してみたい**と思って応募しました。(高校2年)

自分の将来について、**一度ちゃんと考えてみたかった**。(高校1年)

高校生の間に**本格的な小論文を書く絶好の機会**だと考えました。また、この小論文を書く作業の中で、自分の将来の進路について、もう一度深く見つめ直そうと思ったからです。(高校2年)

去年もこの小論文コンテストに参加しましたが、不満足な結果に終わりました。**今年こそは大賞を取りたい**という気持ちで挑みました。(高校2年)

日本は今回未曾有の災害に見舞われて、私自身も次世代を担う一人として日本の復興にしっかり携わっていかねばいけないという思いが芽生えてきました。これまではぼんやりと考えていた**自分なりの考えをしっかりと固め、これからの自分が志す方向性を確認したい**と思ったのが動機です。(高校2年)

日本が大好きだけれど、その思いを文章にしたことがなかったため、このコンテストを良い機会として思いをつづろうと思った。(高校1年)

大人がつくってくれている日本に住む今の自分が、**社会をつくる側に回ったとき、どのようなことができるのか考えてみたかった**。(高校3年)

日本が好きだから。国際化していく世界の中で、日本が世界に負けない誇りを持った国になるために、**日本で育った私に何ができるか探りたかった**。(高校2年)

自分の将来をしっかりと見つめ直すきっかけにしようと思いました。(高校3年)

夏休みに、このコンテストのテーマに則って、世界の動きを考慮しながら、日本の将来について考えてみるのは、**これからの社会を担っていく私たちにとても良い経験になる**と思ったので、応募しました。(高校2年)

夏休みを利用して**何かに挑戦してみたかった**。(高校2年)

自分の考えを人々に伝えたいと感じていたため。(高校3年)

NRI社員による審査の感想

学生の論文を読んで 社内審査委員が感じたこと

日本全体を論じているものは具体性や独自性の点で弱く、個別テーマを論じていたもののほうが面白かったです。全体的に、「まとめ」が弱いので、最後にもう少しメッセージ性を出すと、もっと締まってよかったのではないかと思います。(システムエンジニア/男性)

大学生には難しいテーマだと感じたが、それぞれの論文を読むと、皆、しっかりと考えているばかりでなく、よく勉強していることがわかりました。驚くほどの完成度です。(海外拠点マネジメント/男性)

大学生

個別的な実情や主観的なこだわりも見られましたが、基本的に構成がしっかりしており、課題解決に向けた処方箋の具体性も高かったと思います。大学生の皆さんが、社会に存在している各問題等について、自分たちで深く考え、ナレッジを一生懸命集積させてコンテストに応募したことは、大変貴重な経験になると思いました。(システムエンジニア/男性)

楽しく読み、また審査をすることができました。着眼点や主張などが“自分の言葉”として伝わってきたかどうかを重視して評価しました。(本社管理/男性)

斬新な考えや提案が論述された論文も多くあり、社会に出て常識や定型に捉われつつある自分の思考過程の「固さ」に気づかされました。(システムエンジニア/男性)

震災を経て、自分ごととして今の大学生が、日本はどうあるべきなのか、考えていることを少し垣間見ることができました。未曾有の災害が起こったからこそ、自分ごととしてもっと論文を書いてほしかったと思います。(コンサルタント/女性)

日本人の精神や慣習、文化をビジネスの強みにしていこうという点は共通した主張だった。この点は改めて自分の業務を見直すきっかけとなり、大変参考になった。(コンサルタント/男性)

留学生

留学生が日本のホスピタリティや礼儀を将来の軸とすべきだと考えていることが、新鮮だった。(システムエンジニア/男性)

皆さんしっかりした日本語で、内容のある論文を書かれているのは素晴らしいと思った。惜しむらくは、せっかく日本を客観的に見られる立場であるはずなので、「日本人は当然と思っているが、外から見たら当然ではない」ことを、体験とともに生々しく語ってほしかった。(コンサルタント/男性)

高校生にとっても、東日本大震災の影響はきわめて大きいと実感しました。この問題を取り上げた高校生は、問題解決に前向きに挑戦しようとしており、大変たくましく感じました。(本社管理/男性)

若者ならではの型にはまらない斬新なアイデアが欲しかった。既存のルールに縛られない「夢」を持った若者の登場を切に願う。(コンサルタント/女性)

高校生

高校生が社会について、しっかり考えているということがわかり、びっくりしました。自分の高校時代と比べて、なんと優秀な！というのが率直な感想です。(システムエンジニア/男性)

普段目にすることがない高校生の考えを垣間見ることができて、とても良い経験となりました。全体的に日本の将来については、悲観的であったのが少々残念です。せめて若者たちには、将来に対して夢や希望をもっと持ってもらえるような社会にしていかなければならないと、考えさせられました。(システムエンジニア/男性)

皆さんの作品を読みながら、自分が高校生のころはどんなことを考えていたのだろうか……と思い出します。(事業部マネジメント/女性)

どの論文も応募者それぞれの経験や興味などが違ったストーリーを作っており、興味深く読ませていただくことも多かったです。高校生にとって、普段心にしまっていた夢を文章にすることで、もう一度考えを深くする良い機会になったのではないかと思います。(システムエンジニア/男性)

NRI 社員のコンテスト告知活動 皆さんの高校・大学を NRI 社員が訪問

コンテスト告知活動の主力となるのが有志のNRI社員による学生たちへの呼びかけです。母校やゆかりのある学校に、ポスターやチラシと一緒に、応募を呼びかけるメッセージを送ったり、実際に学校まで足を運んだりして告知活動を行いました。

会津大学

崔 裕二 (流通グローバル事業推進部) は会津大学の講演でコンテストを告知

先生方からは「卒研生の論文の練習に良さそうだ」という反応をいただきました。また、「『文章表現法』という授業の参考にしたい」という感想もあり、大学の授業の一環としても意識してもらえているようです。



学生を前に講演

福岡県立伝習館高等学校

池上 英次 (KPプロジェクト推進部) は母校の校長先生にコンテストを紹介

母校の校長先生に会ってコンテストについて解説しました。校長先生からは「文章を作成するという事は、頭の中の自分の考えを整理できるので非常に良い」「弁論部や演劇部にはよいテーマではないか」といった前向きなコメントをいただき、生徒たちの応募に期待と手応えを感じました。



母校でコンテストをアピール (右が池上)

宮崎日本大学高等学校

若友 千穂 (社会システムコンサルティング部) が先生にコンテストをアピール

先生方には「東京の風を感じられるNRI学生小論文コンテストに応募することは、生徒たちにとってたいへん刺激になる」と喜んでいただきました。また、「理系大学志望の学生たちがNRIに対して憧れを抱いている」というお話を先生からうかがうこともでき、私自身にとっても励みになりました。



毎年訪ねています

広島県立安古市高等学校

小室 一彦 (STAR営業推進室) が学生たちに応募を呼びかけ

母校の2年生の生徒320名を前に、授業の一環として、コンテストへの応募を呼びかけました。身近な事例を挙げながら、NRIという会社を知ってもらい、「2025年のわたし」をテーマに将来の自己像を考えていただきました。論文の執筆が、進路決定のきっかけの一つになってくれるとうれしいと感じました。



体育館で学生たちに説明

立命館大学

中村 広志 (情報システム部) は母校を訪問

担当の方にとっても協力的に対応していただき、うれしく感じました。私が卒業した理工学部・理工学部研究科のあるびわこ・くさつキャンパスの学生オフィスに、ポスターを掲示いただき、一番目立つ場所に冊子やチラシを置いていただきました。



協力的な対応に感謝

おわりに

2011年は、東日本大震災や原子力発電所の事故、
ユーロ危機などをきっかけに、世界のあちこちで、先送りされてきた
数々の問題や矛盾があらわになりました。
同時に、私たちは「未来への責任」として、
先送りを減らす覚悟を求められることになりました。
そうした年に行われた今回の「NRI学生小論文コンテスト」。
多くの応募者の方が、「未来への責任」を果たす覚悟や提案を
論文にしてくださいました。喜ばしく思います。

今年も多くの学校に、コンテスト告知にご協力をいただきました。
また、学年や学級、ゼミ、研究室などで、
応募を学生に勧めてくださる先生方も増えてきました。
協力してくださった先生方、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。
このコンテストが、学生の皆さん、ひいては
日本や世界のよりよい未来につながる場所があれば幸いです。

2011年12月

「NRI学生小論文コンテスト2011」事務局

記事掲載報告

NRI学生小論文コンテストが
メディアにも掲載されました。
その一部を紹介します。



「河北新報」2011年11月22日夕刊



「日本教育新聞」2011年12月12日



「高校生新聞」2012年1月10日



「オルタナS」
<http://alternas.jp/>

「J-castニュース」
<http://www.j-cast.com/>

NRI 学生小論文コンテスト2011
“日本を元気にする”

野村総合研究所 コーポレートコミュニケーション部 CSR推進室
発行：2012年2月

Copyright©2012 Nomura Research Institute, Ltd. All Rights Reserved.





株式会社 野村総合研究所

〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-6-5 丸の内北口ビル
Tel.03-5533-2111

<http://www.nri.co.jp>